

巻 頭 言

コロナパンデミック開始から4年を経て

理事長 佐藤 薫

2020年3月に始まったコロナパンデミックですが、未だくすぶってはいるものの、ワクチンの普及もあって、ようやくマスクを外した自由な生活ができるようになってきました。同年5月に理事長に就任して以来、実に3年5か月に亘り理事会をオンラインで開催してきましたが、昨年10月に初めてハイブリッドを取り入れた対面開催を行いました。賛否の分かれる課題に対しても効率よくかつ深い議論ができ、「会って話す」基本の大切さについて認識を新たにしました。そして何より会議を心から楽しむことができました。会員の皆様方も様々な場面で、今、同様の経験をされていることと思います。こここのところ、オンライン主体の春季大会よりも対面主体の秋季大会の人气が際立って高いのもその表れでしょう。

一方、コロナパンデミックをきっかけに発展したオンライン技術の恩恵は少なくありません。世界中のどこにいても会議への参加が可能となり定足数の心配が大幅に減りましたし、複数の国をつなぐ国際ミーティングも気軽に実施できるようになりました。加えて、オンライン会議は社会的弱者に優しい技術であることも特筆されます。育児、介護、病気のため、あるいは仕事の都合で長期出張がかなわない方もオンライン開催により大会参加が可能になっています。ハイブリッド開催は今のところ、大会主催側の負担の大きいことが難点ですが、これを克服できれば、Diversity and Inclusion (D & I) が進み、より多くの方の学術活動への参加が容易となって気象学の発展にも大きく資すると期待されます。現在、マスクから解放された世の中は、好みが対面開催側に大きく振れています。いずれオンライン開催の良さも見直されるようになり、最適な形に落ち着いていくのではないかと想像されま

す。理事会では、この問題を多面的に捉える「大会のあり方検討ワーキンググループ」を新たに立ち上げ、気象学会にとって最適な大会の姿の検討を進めています。これには春季大会の機能の一部を同時期に開催される日本地球惑星科学連合の連合大会に移す大きな変更案の検討も含まれています。

また、人材育成・男女共同参画委員会からの提案を受けて倫理規程の一部改正を行いました。行動規範第1項（研究等の活動）に「研究資金等の不正使用を行わない」を、第2項（自由と人格、多様な価値観の尊重）に「人格侵害およびハラスメント行為は行わず、これを看過しない」が追記されました。特に後者はD & Iをさらに浸透させるうえで重要な改正です。

第42期のもう一つの大きな活動は、学術委員会による報告書「日本の気象学の現状と展望2024」の発行です。約100名の研究者による執筆が進められており、今後パブリックコメントを経て「天気」に公表される予定です。2014年に公表された、年号以外は同名の報告書の改訂版と位置づけられるこの報告書には、ここ約10年の日本の気象学の進歩や、現時点での約30年先までの展望が述べられることになっています。特に若い会員の皆さまにおかれては、この報告書を大いに参考にして、自らの立ち位置を確認しつつ、自由な発想でご自身の研究を展開していただければ幸いです。

なお、「天気」は昨年、電磁的方法による発刊に変更され、移行期の対応として希望者には冊子体も無料配布してまいりましたが、既にお知らせしていますように、今年からは冊子体の希望者には実費をいただいて配布することが基本となりました。よろしく御理解の上、冊子体希望の方は気象学会事務局までお知らせください。